



TITLE:

<Book review>Michael Moerman,
Agricultural Change and Peasant Choice in a
Thai Village, Berkeley and Los Angeles :
University of California Press, 1968,227+vii
pp

AUTHOR(S):

本岡, 武

CITATION:

本岡, 武. <Book review>Michael Moerman, Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village, Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1968,227+vii pp. 東南アジア研究 1968, 6(2): 463-464

ISSUE DATE:

1968-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55498>

RIGHT:

図 書 紹 介

Keith Buchanan. *The Southeast Asian World, an Introductory Essay*. London: G. Bell and Sons, Ltd., 1967. 176 pp.

イギリスは伝統的に地理学、とくに地誌に強い。本書はこの伝統をふまえた東南アジアの地理学的概説である。東南アジアをいかなる側面から研究するにせよ、地理にかんする常識をもっておくことは大切である。この意味で本書はとくに注目に値する。

ブキャナン教授は1953年いらいニュージーランドの Victoria University of Wellington の地理学教授である。それまで数年にわたりナイジェリアの University of Natal, University College, Ibadan で教鞭をとるとともにアフリカの現地調査に従事、ニュージーランドに移ってから東南アジアの調査を行なったのであり、低開発国地理についての現在指導的な研究者のひとりである。

本書の章をおって内容をごく簡単に紹介する。第1章は東南アジアの特質であって、著者はこの地域を Under-developed というよりむしろ Pre-developed としてとらえたいという。第2章は東南アジア研究者がよく指摘する「統一における多様性 (diversity in unity)」を歴史的に把握する。第3章は自然的基礎であって、地質地形構造・気候・生態などを明らかにする。第4章は食糧農業、第5章は農民生活を取りあげる。転じて第6章では東南アジアとヨーロッパとの政治的経済的一体化を取りあげ、プランテーション農業はここで取り扱われる。第7章は人口問題で、とくに人口の分布と増加率が問題になる。第8章は戦後の独立にともなう新興国の形成全般が、ついで第9章では各国別の国家形成が論ぜられる。最後の第10章は将来の展望であって、著者のきわめて楽観的な見とおしが結論となる。

著者が本書に An Introductory Essay とサブタイトルをつけているように、いずれは Fisher 教授の東南アジア地誌のような大冊を書きあげるつもりかも知れない。Fisher 教授の大著はもちろん現在の東南アジア地誌として最高のものであるが、その大冊のゆえになかなか通読しがたい。それにくら

べると、本書はきわめてハンディである。その意味で入門書として広く推薦したい。(本岡 武)

Michael Moerman. *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968. 227+vii pp.

University of California, Los Angeles の文化人類学科に現在勤務する著者 Moerman 博士が、1959-61年、北タイの Chiengrai 県 Ban Ping に定着調査をし、さらに1965年補足調査を行なったが、その成果が本書である。

本書の題目がそのまま示すように、この Ban Ping において農業、とくに水田作農業がいかに変革しつつあるか、また農民が変革にさいいかなる選択を行なったかを主題とする。

本書の構成を紹介しよう。第1部背景として、第1章では Chiengham 郡と Ban Ping の概要とそこに住む Lue 人の過去。第2章ではその問題としての農業と農民のありかたを把握する。第2部は農業を第3章のプラウ農業と第4章のトラクター農業とに分け、その技術と村落外部関係とを詳論する。第3部は資源としての土地と労働とを取りあげ、第5章は土地の入手、第6章は労働移動とを、同じく技術と村落外部関係の2点から分析する。第7章は農業方式の選択、第8章は農業方式の変革であり、この両章に著者の重点が注がれている。なお付録として、モチ米についてのノート、量的データの入手過程と比較が掲げられている。

本書の特徴として、つぎの3点が指摘できる。第1はプラウ(スキ)耕の農業方式からトラクター耕へのそれが、このようなタイの北端部で生じている事実である。まったく画期的なことであるが、本書においてはじめてこれが本格的に分析されたのである。きわめて原始的伝統的農業へトラクターが持ちこまれた理由こそ、低開発国農業開発の立場からしても、重大な注意が払われなければならない。第2は、この農業方式変革を取りいれる農民の選択であ

る。農民の経済行動の分析は、またひじょうな注目に値しよう。第3は、そのさいの村落外部条件の作用の仕方である。こうした自給自足を主とする村落経済にさえ外部条件がいかに強烈に作用するかは、こんごの開発政策に重要な示唆を与えるであろう。

農業開発論の視点からの私の紹介は、文化人類学者のそれとは異なるであろう。文化人類学の立場からいって、本書はアジアの水稲栽培についての最も詳細な記述のひとつであろうし、また Lue 人について欧文で書かれた最初の研究であろう。さらにタイ研究としても、最近の最大の収穫だと思われる。

私はこれだけの業績をしあげられた Moerman 博士に心から敬意を表するとともに、いまさらながら東南アジア研究にかんするアメリカ側のいちじるしい発展に驚かされるのである。(本岡 武)

Ernest Mortensen and Ervin T. Bulland.
Handbook of Tropical and Sub-Tropical Horticulture. Washington: Department of State, Agency for International Development, 1964. 260 pp.

著者は AID に関係する前はいずれも農業教育に従事した人である。AID その他から熱帯亜熱帯地域に派遣されて豊富な経験をもつが、派遣地に東南アジアは一国も含まれていない。

本書は AID 関係や平和部隊として海外に出てゆく人のために書かれたもので、農業専門家でなくても理解が出来るように平易に書かれている。10章からなるが、主体は第2章の果樹およびその他の木本性作物と第3章のそ菜に関する章である。収録された果樹およびその他の木本性作物は71種で、そのなかにはカカオ、コーヒー、ココヤシ、アブラヤシ、ゴム、チャ、コシヨウ等の工芸作物が含まれている。そ菜は41種で、なかにゴマやリョクトウ、キャツサバ等が含まれているが、東南アジアの市場に多くみられるヘチマやトウガン、レイシ、ササゲ、エンサイ、コエンドロ、各種のアブラナ科のそ菜類等はなく、欧米人の好むどちらかといえば熱帯では高級そ菜に属するものが多い。書名が示すとおり便らんであるので各作物についての記述は極めて簡単であり、読んでいて興味がわいてくるというものではない。

深く学びたい場合は各作物のあとに挙げられている文献によって適当な本を探ることが出来る。農業指導者として熱帯や亜熱帯の低開発国にいった場合は、専門外のことで本に収録されている程度のことはいちおう理解しておく必要があるだろう。また熱帯農学を初めて学ぶには、一般に、概論から入ってゆくのであるが、この際沢山でてくるききなれない熱帯作物の数々を一つ一ついろいろの本を繰り広げて調べていては誠に不便であり、また各作物の記述があまりにも詳しいと本論の概論がいつこう進行しないことをしばしば経験するものであるが、このような場合にも本書は役立つだろう。ただ、東南アジアの農業に関係する者にとっては、もっと東南アジアに多い作物を取り入れてほしかったが、それは東南アジアを知らない著者達の経歴からみて無理からぬことであろう。(佐藤 孝)

歴史・文化・考古学文献出版委員会編『アユタヤ時代古記録集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iii+118 pp.

คณะกรรมการจัดพิมพ์เอกสารทางประวัติศาสตร์วัฒนธรรมและโบราณคดี ประชุมจดหมายเหตุสมัยอยุธยา ภาค ๑

同委員会編『アユタヤ時代寺領・寺院奴隷寄進文集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iv+84 pp.

ประชุมพระตำราบรมราชทัณฑ์เพื่อกลั่นานสมัยอยุธยา ภาค ๑

1767年に行なわれた、ビルマ軍のアユタヤ攻撃によって、アユタヤ時代の記録文書の大部分が散逸してしまったことは広く知られている。信憑性の高いタイ語史料の決定的不足は、アユタヤ史を志す歴史学徒の前に立ちはだかる高い壁である。こうした研究上の障害は、これまででもっばらヨーロッパ語および漢文史料の利用によって克服されようとしてきた。しかし一方、タイ国自体においても、戦火を免れたタイ語史料探索の努力が、まったくなおざりにされていたわけではない。すでに前世紀の末葉以来、ダムロン親王ら歴史学者の手によって、細々ながら古